

社会科における読解力の向上をめざした授業づくり

学籍番号199312

氏名 川北 茜

主指導教員 糸井川 孝之

1. 実践研究の背景

中学校学習指導要領（平成29年改訂）における社会科の教科目標は「社会的な見方・考え方を働かせ、課題を追究したり解決したりする活動を通して、広い視野に立ち、グローバル化する国際社会に主体的に生きる平和で民主的な国家及び社会の形成者に必要な公民としての資質・能力の基礎を次のとおり育成することを目指す。」と示されている。その中の「(2) 社会的事象の意味や意義、特色や相互の関連を多面的・多角的に考察したり、社会にみられる課題の解決に向けて選択・判断したりする力、思考・判断したことを説明したり、それらを基に議論したりする力を養う。」に着目して研究を行った。

批判的思考は、汎用的スキルにも位置付けられる。この批判的思考の過程を楠見(2011)は、「明確化(解釈)」、「推論の土台の検討(情報の分析・評価)」、「推論(帰納・演繹・価値判断)」、「行動決定(問題解決)」の順で示した。特にこの思考過程の前半にある「情報の解釈・分析・評価」は、PISA調査(2018)における「読解力」、「自らの目標を達成し、自らの知識と可能性を発達させ、社会に参加するために、テキストを理解し、利用し、評価し、熟考し、これに取り組むこと」と言い換えることができ、日本はその平均得点の低下がみられる。

このような背景を踏まえ、情報を比較・分析、関連付けなどを行う学習活動を通して、社会科において情報読解力のレベルを意識した読解力を向上させるための授業づくりをめざした。

2. 実践研究

2.1 授業実践Ⅰ

授業実践Ⅰでは、中学2年生を対象に情報読解力のレベル1「言語的読解」の向上を目的とした学習指導（歴史的分野：「近代革命の時代」イギリス革命・フランス革命・アメリカ独立戦争）の実践・分析を行った。実践の中では、連続型テキスト・非連続型テキスト両方の資料の読み取りを取り入れた。この授業実践では、生徒一人一人の記述を分析することはかなわなかったが、机間指導などから、具体的な事実を読解する「言語的読解」は多くの生徒ができていたと感じた。しかし、この実践ではそれぞれ連続型テキスト・非連続型テキスト単一の資料を読み取るだけで終わってしまったので、複数の資料を「比較、分析、評価」を行いながら考えることのできる課題を設定する必要があるなど課題が多くみられた。

2.2 授業実践Ⅱ

授業実践Ⅱでは、中学2年生を対象に情報読解力のレベル2「文脈的読解」の向上を目的と

した学習指導（地理的分野：「九州地方」）の実践・分析を行った。実践の中では、特に地理的分野においてその活用の可能性が高いと判断した非連続型テキストを中心とした資料の読み取りを取り入れた。ただし、授業実践Ⅰで出た課題を改善して、複数の資料を用いて考える課題を設定した。そして、生徒へのアンケート調査（有効回答数140）より、「あなたは、普段の社会科の学習で、資料をもとに自分なりの予想や考えを持つよう意識していますか？（※資料…グラフ、地図、写真など）」で「意識している」「どちらかといえば意識している」と答えた生徒が91人であったのに対し、「九州地方」の学習で、資料をもとに自分なりの予想や考えを持つことができましたか？」では「できた」「どちらかといえばできた」と答えた生徒が123人であったという結果を得た。しかし、この実践で生徒に与えた資料は、わたしが読んでほしいように読ませ、「このように考えてほしい」というように考えさせていたといえるのではないかという課題が残った。

2.2 授業実践Ⅲ

授業実践Ⅲでは、授業実践Ⅱに引き続き、中学2年生を対象に情報読解力のレベル3「適用的読解」の向上を目的とした学習指導（地理的分野：「日本の農業の特徴」）の実践・分析を行った。実践の中では、非連続型テキストを中心とした資料の読み取りに加えて、使う資料自体を生徒たち自身に探してきてもらうような課題を設定した。そして、生徒たちの記述をルブリックで評価し、意見の提示の項目においては、「A：自分の意見を根拠とともに過不足のない形で十分、かつ明確に提示している」「B：自分の根拠とともに明確に提示している」の評価がついた生徒が全体の約80%、資料の扱いについても「A：資料の内容を的確に把握して記述しており、それを根拠として過不足なく十分に成立させている」「B：資料の内容を的確に把握した記述をしており、それを根拠として成立させている」の評価が付いた生徒が全体の約70%を占めるという結果を得ることができた。

3. 総合考察

授業実践Ⅰ・Ⅱ・Ⅲを通して、社会科において情報読解力のレベルを意識した読解力を向上させるための授業の1つの実践例を示すことができた。読解力とは、社会科教育において資料活用・表現を軸に、思考・判断、あるいは関心・意欲・態度など様々な要素を包含した枠組みを持つものであるため、数時間の単元の学習のみで、飛躍的に高まるものではないといえる。しかし、情報読解のレベルに応じて、複数の資料を比較・関連づけすることで情報の関連性を読み取る文脈的読解や自分の生活に適用させる適用的読解ができるような課題設定だけでなく、言語的読解を中心に単一の資料から具体的な情報を読み取る課題設定も行うべきである。つまり、探究型の学習・習得型の学習の両方において読解力の向上をめざして必要があることがわかった。

今後も、全ての生徒に基礎的・基本的な読解技能を習得させるとともに、それを活用し、探究していくことのできる生徒の育成をめざしたより効果的な授業づくりを行うことが求められる。